Sense of Coherence と看護実践への知識活用における自信との関連

大屋愛里、紅林佑介、金谷光子
新潟医療福祉大学 看護学科

【背景・目的】Sense of Coherence（SOC）は、自分の生きている世界は首尾一貫しているという感覚を指す。先行研究では、SOC は、職務満足度やバーンアウトとの関連、教育介入後の学生の SOC 得点の変化の調査が多い。しかし、学習内容を実践活動へ活かす自信との関連を検証したものは見当たらない。SOC と自信との関連を明らかにすることは、今後の看護教育への SOC 活用に新たな示唆を与える可能性が期待できる。本研究では、精神科看護師の SOC と、学習で得た知識を看護実践で活用する自信との関連について調査することを目的とした。

【方法】A 県にある 9 つの精神科病院に勤務する正看護師 881 名を対象とした。属性、SOC を測定する「日本語版 SOC-29」、自己効力感を測定する「自己効力感尺度」、看護師の倫理的行動を測定する「倫理的行動尺度」の 3 つを含んだ質問紙調査を実施した。オリジナル項目として「貴院には、精神疾患や精神薬の作用、副作用、社会資源、看護のあり方に関して定期的に学ぶ機会はありますか」と「それらの学びを日々の患者との関りで活用できている自信はありますか」も追加した。前者は「あり」「なし」「不明」の三件法で、後者は「自信がある」、「まあまあ自信がある」「あまり自信がない」「自身がない」の四件法で問うた。分析方法はまず対象者を 4 つの指標（SOC 合計点、有意味感、処理可能感、把握可能感）でそれぞれ高群と低群の二群に分けた。基準値はそれぞれの指標の平均値とした。次に「自信がある」と「まあまあ自信がある」を「自信あり」とし、「あまり自信がない」と「自信がない」を「自信なし」とした。それぞれの回答割合を各群間で比較をした。統計解析は Pearson の χ 二乗検定を用い、有意水準は 5%とした。なお、本研究は新潟医療福祉大学倫理委員会によって承認を受けている。

【結果】有効回答数 610(有効回答率 69.1%)のうち、「貴院には、精神疾患や精神薬の作用、副作用、社会資源、看護のあり方に関して定期的に学ぶ機会はありますか」の問いに対し、「ある」と答えた者は 418 名(68.5%)であった。この対象者（n=418）の平均年齢は 41.6±10.9 歳、精神科での勤務年数は 13.0±9.3 年、女性 270 名(64.6%)であった。学歴は専門学校が最も多く 342 名(81.8%)、所属部署は慢性期閉鎖病棟が最も多く、135 名(32.4%)であった。

「SOC 低群」(n=212)よりも「SOC 高群」(n=206)のほうが、学びを活かす「自信あり」と回答した者が多かった（p< 0.001）（表）。また、有意味感、処理可能感及び把握可能感の低群よりも、高群の方が学びを活かす「自信あり」の割合が高く、3 つの下位尺度のうち最もオッズ比が高かったのは、有意味感(OR:2.6)であった(表)。

表 SOC及び各下位尺度の高低別に見た「自信」の有無の割合（n=418）

		臨床活動へ活かす自信 あり	なし	OR	95%CI	p値
SOC						
高群	(n=206)	61.7%	46.1%	1.5	1.499−3.279	p<.001
低群	(n=212)	40.0%	52.4%			
有意味感						
高群	(n=211)	62.0%	37.9%	2.6	1.718−3.777	p<.001
低群	(n=207)	39.1%	60.8%			
処理可能感						
高群	(n=215)	56.7%	43.3%	1.7	1.119−2.424	p<.011
低群	(n=203)	44.3%	45.8%			
把握可能感						
高群	(n=222)	57.2%	42.8%	1.8	1.184−2.573	p<.005
低群	(n=196)	43.4%	50.0%			

【考察】SOC が高い精神科看護師は、学習で得た内容を臨床で活用する自信を持ちやすいことが明らかになった。

SOC は 30 歳前後までに安定し、その後は安定するとされている。しかし若干ながら 30 歳以降も、強い SOC は増強し、弱い SOC は減弱するという良循環、悪循環すると示唆されている。また、看護学生の場合、体験学習前の SOC が高いほど、ポジティブ思考が強く、将来の予測と期待感が増し、ストレス対処行動がとれ、達成感が得られると報告され、SOC が看護実践能力に寄与すると示唆されている。本結果で SOC の高さと学習を活かす自信の高さが示され、それらの示唆を支持する結果が得られた。

精神科看護では、疾患の理解はもとより、退院支援にむけた多職種連携や向精神薬の選択など、様々な知識を獲得し、日々変化する情報に対応していく必要がある。本研究結果では、SOC の下位尺度の中でも特に有意味感が高い者は学びを活かす自信を持っていた。有意味感とは、日々の営みにやりがいや生きる意味が感じられるという感覚である。つまり有意味感が高い者は、院内研修などの学びの機会に意味を感じ、前向きに知識を吸収し、看護実践の場へ活用しようという意識が高くなる可能性がある。

今後の看護教育への示唆として、有意味感を高めることが重要である。有意味感の向上で、他の下位尺度も向上する可能性や、成功体験繰り返すことで SOC を強化できると示されている。SOC を強化し、知識を吸収しつつ臨床現場で発揮し、成功体験を積むことの繰り返しが、精神科看護師の SOC 及び看護の質向上において良循環となることが期待される。さらに、他者の能力を批判的に評価、軽視する傾向に付随する仮想的有能感は、SOC と負の相関関係にあり、SOC が高い者は仮想的(他者軽視的)な有能感が低い可能性も報告されている。したがって、様々な精神疾患の困難事例への対応を求められる昨今、精神科看護師の SOC 向上は看護の質の改善も見込めるものであると考えられる。研究の限界として、本研究は横断調査であり、SOC の高低と学びを活かす自信の因果関係は明らかにならず、また他の交絡因子を制御していないため、それらの影響を排除できないものであった。

【結論】精神科看護師の SOC、特に有意味感の高さは、学習後の知識を看護実践の場で活用する自信と関連する。